

平成26年7月7日(月)

老球の細道32

会津のバスケットボールよ熱くあれ

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

2014年ブラジルで行われているサッカーワールドカップのベスト4が出そろった。ヨーロッパ2チーム(ドイツとオランダ)、南米2チーム(ブラジルとアルゼンチン)である。ベスト4には入らなかったヨーロッパや南米の小国が日本のレベルをはるかに上回っていることには驚かされる。バスケットボールはもっとひどい状態かもしれないが。

ヨーロッパや南米には日本より人口が少なく、経済的にも貧しい国でもサッカーやバスケットなどスポーツが盛んで強い国がたくさんある。それらの国は、国がどんなに貧しくなっても、家計がどんなに苦しくてもスポーツを見たり、プレーしたりするお金はケチらないという。一生懸命仕事をして、一日の終わりにスポーツを観戦したり、プレーしたりすることによって、感動や元気をもらい、また明日からがんばれるのだという。だから、生活にスポーツ文化が必需品となっている。

ちょっと会社の景気が悪くなると、いの一にスポーツへの予算を削減したり、会社の運動部を廃部にしてしまったり、勉強の敵にして最も伸び盛りの時にスポーツ活動を制限してしまう日本の社会とは段違いである。

かつて夏季五輪を東京に招致しようと頑張っていた建築家の安藤忠雄さんが朝日新聞で述べていたことがある。

「オリンピックは経済効果のためにやるのではない。この国に目標を作りたいんです。1964年の東京五輪時を思い出すと、日本人は目標があると一致団結する。1950年代に来日した外国人たちは『この国は必ず復興する』と語っていた。大人はよく働き子どもが目が輝いているからというんです。今はどうでしょう。子どもたちの目は輝いていますか？大人は生き生きと働いていますか？(中略) 問題解決には、情熱に行う部分と理性的に行う部分がある。理性だけでは物事は動かない。理性で動かないものは情熱で動かす。人々が情熱をかけるきっかけ、それがオリンピックである」

建築家の安藤氏は高校卒業後独学で建築を学び、「セビリア万博日本政府館」「東急東横線渋谷駅」等を建築して数多くの国際的な建築賞を受賞している。自らが独学で築き上げた努力の人であるから、人間のパッション(情熱)、モチベーション(やる気)の重要性を人一倍認識している。世界の一流プレー、トップアスリートを生で見ると、これはすごいと感動することが、どれだけ人間の生きていく力を呼び起こすことかを力説している。

オリンピックのみならず、私達が毎日行っているバスケットボールも同じである。目標を持って練習したり、試合をしたりすることによって、自分自身が元気になり、毎日を輝かせて意味のある一日を生きることができる。そして、そのような元気で輝いているバスケットボールアスリート達を周囲の人達が見て、『よし、自分も!』と元気づけられる人が出てくれたらこれまた幸いである。

スポーツ選手、バスケットボールアスリートは多くの人々に感動と元気、そして夢を与えるという使命もある。自らが夢追い人となり、常に大きな目標を携えながら元気よく生きていかなければならない。